



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明の総合的再考：詩業と思想展開を中心として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	増井, 真琴
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13409号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74467
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Makoto_Masui_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 増 井 真 琴

学位論文題名

小川未明の総合的再考 ——詩業と思想展開を中心として

・本論文の観点と方法

本論文は、作家・小川未明の業績総体について総合的に再検討を試みたものである。従来の日本近代文学史において、未明は「日本児童文学の父」「日本のアンデルセン」と呼ばれ、児童文学界の大家として認められてきた。その評価は、「赤い蠟燭と人魚」「野薔薇」「牛女」など、大正期のロマン主義的な童話を中心として行われたものである。しかし未明は、明治中期から昭和戦後期まで半世紀以上にも互って文筆活動を展開した長命の文人であり、大正期の童話に偏ったこれまでの評価は明らかに不十分である。

本論文はこのような観点から、未明評価における大正童話中心主義の克服を目指し、近年公開された新資料に加えて申請者自身の発掘した資料をも駆使し、大正童話以外の生涯に互る童話をはじめとして、漢詩・口語自由詩・小説・評論・随筆など童話以外の文業を積極的に論の対象に据えて分析する仕方により、従来の童話作家・未明という見方を相対化し、明治・大正・昭和の三代を生きた作家の作品群を改めて解釈し直し、新たな評価を加えている。

具体的には、未明が生きた時代を明治・大正・昭和戦前・昭和戦後の四期に大別し、各時代ごとに再考が必要と思われる主要なテーマを、それぞれ詩業・社会主義・国家主義・戦後リベラリズムとして抽出し、時代ごとに未明の業績を詳細に検討する方法を採っている。

・本論文の内容

序論では、これまでの小川未明研究史の現状と課題を見据えた上で、本研究の目的・方法・特色を明らかにした。

第Ⅰ部「詩業——漢詩と口語自由詩——」（1～2章）では、小川未明が明治年間に著していた漢詩および口語自由詩を再考した。1章では、新潟・高田中学時代に、未明（本名・小川健作）が紡いでいた漢詩（五言絶句・七言絶句）の検証を行った。申請者は、今回新たに発見した新資料を含む全一〇編の漢詩について、訓読・語釈・通釈・押韻・平仄・出典を明らかにした上で解釈を加え、それらから後の文学作品との質的連続性を読み取って指摘した。2章では、未明が生涯に著した唯一の詩集である『あの山越えて』の検証を行った。本書は大正初期の出版物であるものの、実際は明治三〇・四〇年代の小説の文章を改稿して生まれた、明治を起点とする詩集である。本章では小説から詩へ至る改稿過程の分析を通して、本詩集の構成上の特徴や日本近代詩史上の位置を明らかにした。

第Ⅱ部「社会主義——アナキズムと共産主義——」（3～5章）では、大正年間の未明のアナキズムおよび共産主義思想との関わりを再検討した。3章では、未明の童話「時計のない村」について、作中の時計の表象に注目して作品分析を行った。本作は未明のアナキスト的なユートピア志向が現れた作品であるが、発表当時の未明の他の文章や行動からは、マルクス主義への共感も相当程度看取される。本章では、当時の未明の思想のあり方を、アナキズムとマルクス主義の両要素が未分化のまま併存していたものとして再定位した。4章では、未明の小説「血の車輪」を作中の汽車表象

に着目して分析した。本作は基本的には「国家対民衆」の二項対立図式を大枠とした一種の反戦小説であるが、単なる反戦主義の鼓吹に留まらない近代文明批判も盛り込まれている。本章では、本作品や同時代言説の分析を通して、未明の社会主義思想の可能性と限界を探った。5章では、大正期の未明の知識人批判を糸口に、作家としての未明の経歴において重要とされる「童話作家宣言」の再解釈を行った。この「宣言」は従来、アナキスト系作家の未明が当時のマルクス主義の台頭について行けず、童話へ逃れたとする解釈が一般的であったが、本章では、マルクス主義にも親和性を有していた未明の挫折という見地から新たな解釈を提示した。

第Ⅲ部「国家主義——転向と国策協力——」（6～9章）では、昭和戦前の小川未明の転向・国策協力を再検証する。6章では、大正から昭和戦前にかけて未明がたどった転向の軌跡を通史的に振り返った。両時期の未明の行動と発言を分析し比較検討することで、その社会主義から国家主義への転向の歩みを追跡した。また、中野重治や河上肇など同時代の他の文学者・知識人と比して、未明の転向が有していた特徴を、日本近代転向史上の位置づけに留意して考察を加えた。7章では、満州事変の際の未明の動向を把握するために、柳条湖事件から塘沽停戦協定、そして盧溝橋事件へかけての未明の歩みを包括的に検証した。この時期の未明は、大正期に入れ込んだ左翼ラディカリズムとは距離を置きつつも、社会主義思想をまだ完全には放棄していなかった。本章では、社会主義から国家主義へ徐々に移行しつつあった、十五年戦争初期の未明の思想状況を明らかにした。8章では、日中戦争時の未明の態度を明らかにするために、童話「僕も戦争に行くんだ」に関する作品分析を、作中に描かれた戦争の表象を中心として行った。本章では、大和田健樹作詞の軍歌「日本陸軍」等の戦争表象を手掛かりに、本作が第一次近衛文麿内閣で発動された「国民精神総動員運動」の影響下にあった、極めて時局的な転向・国策協力文学であることを明らかにしている。9章では、大東亜戦争時の未明の動向を追究し、彼が児童文化分野の国策協力団体である日本少国民文化協会（少文協）とどのような接点を有していたのかについて、包括的な検証を行った。特に、少文協の創立・運営に深い関わりを有していた未明が、「大東亜共栄圏」構想の信奉者として、熱心に戦争協力に励んでいた事実を明らかにした。また、伊藤整ら大東亜戦争下の文学者の動向と未明のそのの相関関係についても併せて考察した。

第Ⅳ部「戦後リベラリズム——再転向と晩年——」（10～12章）では、昭和戦後の小川未明の再転向と晩年の活動について再検討を加える。10章では、昭和戦前から昭和戦後にかけての未明の再転向の軌跡を通時的に振り返った。昭和戦前期の未明は、天皇を中心とする家族国家の建設を主張してやまない国家主義者であったが、終戦を迎えるや一転して反戦・民主主義の主張者となった。本章では、昭和戦後期の未明の行動・発言を分析し、このような未明の再転向の歩みを詳述した。11章では、未明の童話「兄の声」に関する作品分析を、戦中と戦後の航空兵（特攻隊）の表象を比較することを通して行った。すなわち敗戦を挿んで、作中の航空兵は愛国烈士から平和主義者へと一変してしまう。本章では、このような航空兵表象の変容に注目することにより、自らの発言や表現について真摯な反省を経ることなく、GHQ施政下の時局に便乗していった未明の再転向の実態を照射した。12章では、未明が没するまでの最後の約10年間を「晩年」と定義し、この晩年における未明の人と作品を包括的に検証した。晩年の未明が、リベラリストとしての側面と自国家・自民族中心主義者としての側面を同居させた老国士として余生を送っていた事実を明らかにした。

結論では、本論文で詳述した全四部の内容を各部ごとに改めて整理するとともに、今後の課題をも記した。すなわち、漢詩研究のいっそうの徹底、書簡・日記などの一次資料の探索、書籍としての刊行物の研究などである。総じて本論文によって、小川未明を単純に「童話作家」という鋳型から解放しえたものとして結論づけた。